

2013年5月30日
 学習院大学輔仁会アーチェリー部
 監督 小林 大介

2013年度関東学生アーチェリー男女リーグ戦報告

1 男子チームについて

1-1 男子リーグ戦1部Bブロック結果

- ・ 3勝2敗で、1部Bブロック3位

男子リーグ戦1部Bブロック星取表

Bブロック	日本工業	専修	学習院	拓殖	東京理科	東洋	勝	－	負
日本工業		○3866	○3873	○3857	○3880	○3854	5	－	0
専修	●3807		○3910	○3923	○3907	○3885	4	－	1
学習院	●3798	●3793		○3867	○3766	○3794	3	－	2
拓殖	●3803	●3830	●3801		○3831	○3813	2	－	3
東京理科	●3769	●3743	●3723	●3731		○3687	1	－	4
東洋	●3752	●3636	●3760	●3723	●3635		0	－	5

・ 第2戦 東京理科大学戦（4月14日）

学習院（3766） ○ － ● 東京理科（3723）

初戦ということで、緊張のため50m序盤は思うようにグルーピングしなかった。大きな外しは目立たないものの、10点・9点が少なく、エンドの平均点も47～49点と伸びず、相手校に対しても15点のリード50mを終えた。30mは切り替えることができ、ベスト6の平均も概ね56点をキープし、初戦を白星スタートで飾ることができた。

・ 第3戦 拓殖大学戦（4月21日）

学習院（3867） ○ － ● 拓殖（3801）

序盤からリズム、射のタイミングが良く、良い緊張感を持って試合に臨むことができた。終始、リズム、射のタイミングが乱れることなく、若干のミスが出てもすぐに切り替えることができた。10点に向かってしっかりと押し込む、寄せていくショットができていた。ベスト6では50m306.83平均、30m337.67平均と高いアベレージを出すことができ、相手校が本調子ではなかったにせよ、1度もリードを奪われることなくチーム試合新のスコアで試合を終えることができた。

・第4戦 専修大学戦（4月28日）

学習院（3793） ● - ○ 専修（3910）

王座出場権獲得のためには落とせない試合であった。50m4 エンド目までは相手校と競り合うことができたが、50m5 回目・6 回目で本院がミスを出している間、相手校のベスト6 の平均は53 点を超えており、大きくリードを奪われた。30m においては、本院もベスト6 で55 点前後のアベレージをキープするものの、相手校のベスト6 は概ね56 点を超えてきており、更に点差を拡げられる結果となった。昨年のブロック優勝校との実力差を見せつけられる結果となった。

・第5戦 東洋大学戦（5月5日）

学習院（3794） ○ - ● 東洋（3760）

無風でコンディションは良かったが、1 回のミスを引きずったりして点数が思ったほど伸びなかった。30m では立ち直り、ベスト6 のアベレージは概ね55 点を超えることができた。結果的には相手校の5 人目・6 人目の選手の点が伸びなかったことにより、何とか34 点差で勝利することができた。

・第1戦 日本工業大学戦（5月12日）

学習院（3798） ● - ○ 日本工業（3873）

この1 戦に最低3880 点以上のスコアで勝利すれば王座決定戦出場権獲得の可能性のある試合であった。選手全員が自己新記録ペースで行かなければ王座決定戦出場は難しく、ハードルは高かったが、チャレンジャーとして思い切り良く臨めた試合であった。序盤、相手校からリードを奪うものの50m4 エンド目に本院がミスしている間、相手校のベスト6 平均が52 点を超え突き放された。その後、徐々に点差を拡げられ、力及ばず敗北を喫した。しかし、30m の最終回、4 年生でただ一人選手で出場した主将の藤井が60 点を出し、最後の意地を見せることができた。

1-2 総評・展望

今年のリーグ戦の成績は、昨年同様、1 部リーグで第3 位であった。目標であった王座決定戦出場権獲得は成し得なかった。

本院の点数を見ると、昨年のリーグ戦全5 戦の平均点は3804.8 点平均、今年は3803.6 点平均であった。これを考えると第54 代の抜けた穴を埋め、学年を問わず各選手が技術を向上させたことで、チームの実力をキープできたと評価できる。5 戦の内訳を見てみると、昨年は3800 点以上を3 回出しているのに対し、今年は1 回であった。とは言うものの、今年の最高点であった試合は3867 点であり、「ここぞ」というときの勝負強さや爆発力は発揮できたと考えている。

しかし、今年王座出場権を獲得した5戦平均を見ると、日本体育大学 3881.6 点平均、日本工業大学 3866.0 点平均、慶應義塾大学 3863.0 点平均、専修大学 3886.4 点平均であった。第2位の慶應義塾大学で本院の最高点である 3867 点を下回ったのは5回中3回、専修大学で5回中1回であった。この2校に勝つ確率は10%を下回っているであろう。そう考えた場合、確実に王座決定戦出場権獲得のためには常に最低 3870 点を超える必要があると分析できる。ベスト6で645点平均である。今の本院においてはハードルが高い。

特に、王座出場権を獲得したチームと本院を比べてみると、プレッシャーに対する耐性の差を感じる。本院が引き離されないよう喰らい付くも、あっさり引き離されることがしばしばであった。彼らは、「ここぞ」というときこそ、冷静に淡々と自分の射をしていた。また、本院の選手は例えば 50m で 57 点出した次のエンドで 47 点という具合に大きく落としてしまうことがあるが、彼らにはそれが少ない。いい点数を出して、逆に焦ってしまう点、まだまだ中級者の域を脱却できていない。「50m で 57 点、あたりまえ」というくらいに高い点数を出すのが当たり前の状態にしなければ彼らに勝つことはできない。

もともと振り返ってみると、第55代スタートに当たっては、第54代からリーグ第3位の「古豪学習院」の看板を引き継ぎ、相当なプレッシャーのかかるものであったと思う。引継ぎ直後は、練習量の少なさや幹部の代の選手のスコアの低さなど問題を指摘され、多難な滑り出しであった。しかし、主将中心に良くまとまり、意識を高く持つ中でも、メリハリをつけ下級生を牽引してくれた。2年生はチームの主軸として活躍してくれたし、1年生は男子部員しかいなかったが、そのためもあってか競争心が旺盛であり、それがチームにいい影響を及ぼしたと感じている。リーグが近づくにつれ、試合前の選考会においてレギュラー争いも熾烈となり、それがお互いを高めあうことに繋がったのではないかと思う。

チームとしては非常にいい形で第55代から次の第56代に引き継ぐことができた。リーグ戦に出場することが叶わなかった選手も実力を上げてきている。来年こそは、王座決定戦出場権を獲得できるよう、努力して行きたい。

2 女子チームについて

2-1 女子リーグ戦2部Bブロック結果

- ・4勝0敗で、2部Bブロック第1位

女子リーグ戦2部Bブロック星取表

Bブロック	学習院	法政	中央	駒沢	日本	(記録会)	勝	-	負
学習院		○2468	○2398	○2394	○2476	(2444)	4	-	0
法政	●2384		●2344	○2406	○2382	(2448)	2	-	2
中央	●2330	○2394		●2337	○2398	(2380)	2	-	2
駒沢	●2290	●2387	○2367		○2308	(2319)	2	-	2
日本	●2066	●2166	●2116	●2249		(1847)	0	-	4
-	-	-	-	-	-		-	-	-

・第2戦 駒沢大学戦（4月14日）

学習院（2394） ○ - ● 駒沢（2290）

50mでは風もなく概ねうまく射つことができたが、30mに入り不規則に吹く風のため、射を崩す選手が多く、思うように矢がグルーピングしなかった。4年生エースたちの不調もありチームの点数が伸びなかったが、その分、チームでフォローするため新3年生のレベルアップが必要となる。

・第3戦 中央大学戦（4月21日）

学習院（2398） ○ - ● 中央（2330）

過去の対戦成績やリーグ戦第1戦の結果から、1部2部入替戦進出を争う相手との1戦となった。硬さもあり、50mの点数が伸びずシーソーゲームが続いた。相手校に対し2点リードで50mを終えたものの、50mの強化が今回の試合における反省点となった。30mでは普段どおりの射ができるようになり、ベスト4で55点平均を3回超え、相手校の点数が伸びない間、毎回点差を拓けることができた。

・第4戦 記録会（4月28日）

学習院（2444）

記録会ということもあり、相手校がおらず緊張することなく伸び伸びと射つことができた。4年生エースたちの活躍もあり2400点を超えることができた。リーグ戦で2400点を超えることができたという意味で自信に繋がった。50mのスコアも前回に比べ平均点で11点上がり（前回272.25点平均、今回283点平均）、50m強化という課題に取り組んだ結果と考えられる。

・第1戦 日本大学戦（5月3日）

学習院（2476） ○ - ● 日本（2066）

前回の試合から中4日での試合となったが、うまく調整して試合に臨むことができた。コンディションも良く、射技的にはリズム・タイミングが良く、集中して実力を発揮することができた。チーム試合新を出すこともでき、大いに盛り上がった。ベスト4の50m平均は285.75点、30m平均は333.25点となっており、特に30mは本院男子のチーム平均に匹敵するスコアとなった。

・第5戦 法政大学戦（5月5日）

学習院（2468） ○ - ● 法政（2384）

前回の試合から中1日ではあったが、良い流れ、良い調子を維持して試合に臨むことができた。第1～4戦の結果から実質的に2部Bブロックの優勝決定戦ということもあり緊張する試合となったが、冷静に試合に臨むことができた。射のバランスも良く、ベスト4の50m平均は289.25点と前回は上回った。30mにおいても、いつもどおりのリズム、タイミングで射つことができ、相手校に1度もリードを許さず、高スコアで試合を終えることができた。

2-2 女子リーグ戦1部・2部入替戦（5月19日）

- ・入替戦4校中第1位で、1部昇格

女子入替戦結果

順位	大学名	リーグ戦5戦結果	50m	30m	Total	入替戦結果
1位	学習院大学	2部Bブロック1位	1120	1292	2412	1部昇格
2位	青山学院大学	2部Aブロック1位	1096	1281	2377	1部昇格
3位	東京理科大学	1部Aブロック6位	1070	1235	2305	2部降格
4位	専修大学	1部Bブロック6位	928	1193	2121	2部降格

最終戦ということで、気持ちを引き締めて臨んだ。緊張のため思うような射ができず、引き戻し、時間ぎりぎりのエンドが目立った。選手個人のリズムが悪くなることで、それがチーム全体に波及する状態が見られた。タイミングが遅くなりミスも出たが、最小限にとどめることができ、切替えもできていた。第55代の最終戦ということで、チーム全員で楽しんで試合をすることができた。

2-3 総評・展望

今年の4年生の代、第55代は、選手個々人の能力は高いものがあったが、リーグ戦においては苦労の連続であったと思う。新2年生のときからチームの主力として

試合に出場していたが、新2年生のときには2部降格の憂き目に遭い、新3年生のときは僅差で敗れて1部2部入替戦に進出することができなかった。非常に悔しい思いをしてきたと思う。その意味では2013年度のリーグ戦は、リベンジマッチと言えよう。昨年のリーグ戦から1年間、日々練習を重ね、時には迷いながらも女子リーダーを中心にチームを作っていた。

本院のチームのリーグ戦5戦の平均点は、2436.00点であり、1部Aブロック優勝の日本体育大学2574.6点、1部Bブロック優勝の早稲田大学2495.4点に次ぐ点数となっている。1部においても十分勝ち抜いて行ける実力を備えていたと言えよう。事実、リーグ戦前の練習試合においても1部校を撃破している。であるからこそ、昨年のリーグ戦で1部昇格できなかったのは惜しかった。しかし、それは昨年のリーグ戦において十分に勝機がありながら勝利を掴むことができなかったことによる。今年度においては、本院より低い点数のチームが王座決定戦に出場するが、そのチームは勝機を掴むことができたから出場権を獲得したのである。王座決定戦が賭かった試合は1部2部入替戦以上にプレッシャーのかかる試合となる。仮に本院が今年その場に立てたとして、いつもどおり、平常心で射つことができたか？ 答えは出ないが、相当なプレッシャーの中での試合となることだけは確かである。

昨年・今年のリーグ戦と勝つことの難しさを知った。現在の関東において日本体育大学以外の1部校と2部校上位の差は大きくないと感じている。特に女子の場合、上位4名の合計点で競うので、ベスト4で高スコアが出ればチーム点が大きく上がるが、崩れればガクンと下がる。勝負は時の運ということもあるが、弛まぬ努力をしたチームが最後は勝利を掴むことができるのではないかと思う。1年で結果は出ないかもしれないが、努力を続ければ2年後、3年後に結果は出るものである。そう信じ、第55代がスタートするときに監督として次の言葉を送った。日露戦争においてロシアバルチック艦隊を破った東郷平八郎の側近、秋山真之の訓示の言葉である。

「神明は唯平素の鍛練に力め、戦はずして既に勝てる者に勝利の栄冠を授けると同時に、一勝に満足して治平に安ずる者より直に之を褫ふ。古人曰く勝つて兜の緒を締めよと。」

第55代はこのリーグ戦をもって引退となるが、第56代は3年生と1年生で女子チームを作らなければならない。2年生不在である。また、チームの点数を稼ぎ出していた4年生エースの穴も埋めなければならない。第55代から1部昇格という最高のプレゼントを貰ったが、時に大きなプレッシャーと感ずるときがあるかもしれない。しかし、1部リーグにいるということは王座決定戦出場のある機会があるということである。

1年間、弛まぬ努力を続け、勝機を掴み取って行きたいと考えている。